

上顎臼歯欠損に対して HA コーティングインプラントを応用した 1 症例

安光 秀人

A Case of Maxillary Molar Missing Treated by HA-coated Implants

YASUMITSU Hidehito

I. 緒 言

歯が欠損し長期間放置された歯槽堤においては骨の廃用性萎縮のため脆弱な骨質 (Misch の分類で D 4)¹⁾ となり、インプラントの初期固定ならびに植立後の安定の確保が困難なことがある。今回 HA コーティングインプラントの使用ならびにその術式の工夫によって、良好な結果が得られたので報告する。

II. 症例の概要

患者：71 歳，女性。

初 診：2004 年 2 月。

主 訴：4] 動揺および 7 6] 欠損による咀嚼障害。

既往歴：特記事項なし。

現病歴：数年前より 4] の動揺および 7 6] 欠損による咀嚼障害のため、インプラント治療を希望して当院に来院した。

口腔内所見：上顎左側臼歯部はわずかに挺出していたが、咬合状態および顎関節に異常は認められなかった (図 1)。

画像所見：パノラマエックス線写真では 4] は中等度の辺縁性骨吸収を呈し、その他の残存歯周辺の骨の状態は良好であった (図 2)。CT 診断の結果、4] 根尖端より上顎洞底までの距離は約 16 mm であり、7 6] 歯槽頂より上顎洞底までの距離は 6] 約 14 mm、7] 約 13 mm であった。また 4] 歯槽頂相当部の頬舌的幅径

は約 11 mm、7 6] 歯槽頂相当部の頬舌的幅径は 6] 約 12 mm、7] 約 12 mm であった。さらに MISCH の CT 値 (HU) によると 4] : D 3 (395) 6] : D 4 (183) 7] : D 4 (164) であった。

診 断：7 6]、7] 欠損、4] 中等度の辺縁性歯周炎、7 6] 欠損部は D 4 の骨質であるものの、十分な骨幅・骨内長を確保できるため、インプラント治療の適応症と診断し、HA コーティングしたオステオインテグレーションタイプインプラント (FINATITE[®], JMM 社製) を選択した。

また 4] は抜歯同時埋入を計画した。

III. 治療内容

治療に先立ち 7 6] 欠損の骨質が脆弱であるために、骨の緻密化を図りながら埋入する必要性を、CT 画像や模型を用いて患者に十分説明し、了解を得たうえで着手した。

2004 年 3 月上顎右側臼歯部に JMM 製 HA コーティングインプラント (一回法、4] 幅径 3.7 mm 長径 12 mm、7 6] 幅径 4.2 mm 長径 12 mm) を埋入した。術式としては、4] はペリオトームにて頬側骨壁を破折しないよう注意深く抜歯を行い、口蓋側にフィクスチャーを骨縁下約 1 mm 深く埋入した。7 6] は直径 3.2 mm のドリルを使用して低速回転 (約 200 rpm) で骨内形成を行った後、十分な初期固定を得るためにオステオトームで骨の圧縮・拡大を行いながら、JMM 製 HA コーティングインプラントをそれぞれセ